

『バージンロードで恋をする』

著：小笠原あやの

ill：如月弘鷹

海王寺のフェラーリは、鈴羽を乗せて夜の街を走る。

ふたりの間に、今、まだ漂っている重い空気も、車のスピードで振り落とせばいいのにと、鈴羽は思った。

ぼんやりと外を眺めていると、次第に見馴れた風景になっていく。

そして、最終的に車が到着した場所に、啞然とする。

（あれ？）

「鈴羽、着いたぞ」

「着いたぞって、ここホテルの駐車場だよ？」

これで鈴羽は、退社後二回も職場へ帰ってきてしまったことになる。

「降りなさい」

促されるまま車から降りると、夜のひんやりした秋風が頬を撫でた。

鈴羽は、勝手に歩き出した海王寺のあとを追う。

「どこへ行くの？」

広い背中に向かって訊ねる。

鈴羽は、なんとなく、その問いかけに、海王寺が答えてくれないような気がした。

でも、その予想は少し外れた。

確かに、海王寺は鈴羽の質問に言葉では返してくれなかったが、代わりに肩越しに振り返り、サッと右手を、鈴羽に向かって差し出したのだ。

「？」

「おいで」

（もしかして、この手は、暗に「手を繋ごう」って言っているのかな？）

つまり、もう怒ってないということだろうか？

鈴羽は戸惑う。

そして、思わず誰も見ていないか、周りを見回し確認してしまった。

だが、こんな時間にホテルの中庭の散策をする宿泊客がいるはずもなく、辺りに人影はない。

思い切って手を繋ぐと、大きな手は、鈴羽の手をすっぽり包みこんで、なお余りある感じだ。

「暗いから気をつけて」

海王寺は優しく穏やかな声でささやきながら、携帯用の懐中電灯をつけた。

これは海王寺を含め、誰にも言えない秘密なのだが、実をいうと、鈴羽は一度でいいから、海王寺とこんなふうに手を繋いでみたかったのだ。

思いがけず夢が叶って、鈴羽は内心、はしゃいでしまっている。

そして、初めて海王寺と逢った、渋谷の交差点での出来事を思い出し、なぜか甘酸っぱい気持ちになった。

海王寺の落とし物を拾って、手渡したすぐあと、海王寺は鈴羽を広い胸の中に抱き

締めてくれた。

後にも先にも、あんなふうに、力いっぱい抱き締められたことなんてない。

(あの日は、雪のちらつく寒い日だったよなー……)

———あのときみたいに、オレのことをギュッと抱き締めてくれないかな。……と、うっかり、そこまで考えてしまい、慌ててその考えを打ち消し、鈴羽はひとりで朱くなる。

さっきのフランス料理店で飲んだワインで、酔っているのかも知れない。

飲んだといっても食前酒で、かなりの少量だったのだが、そういうことにしておきたい。

そんな鈴羽の心を見透かすように、海王寺は鈴羽の手を、急に強く、握り締めた。

「ど、どうしたの!？」

ビックリして、口から心臓が飛び出すかと思った。

思わず声が裏返ってしまったが、返された海王寺の声は至って冷静だった。

「新しいチャペルが完成したのは知ってるか？」

「し、知ってるよ。……来月からオープンなんだよね？」

「これからいっしょに見に行こう」

「これから？ でも、こんな時間に開いてるかな？」

鈴羽は素朴な疑問を口にしながら、海王寺の顔を見上げる。外灯に照らされた海王寺の顔は、甘く微笑んでいる。

もう、怒っている様子がないことに、鈴羽は安心した。

「チャペルの鍵なら、ここに……」

そう言いながら、海王寺が見せてくれた銀色の鍵が、キラッと光る。

「どうして持ってるんだよ？ いいの？」

「大丈夫。警備室の許可はとってある」

「ふうん、それなら平気だね」

昼間は眩(まばゆ)いばかりの緑豊かな庭園も、夜の闇には無力らしく、視界に何も映らない。

もしも外灯がなかったら、目の前が切り立つ崖だとしても気づかないで進んでしまうだろう。

まさに、“一寸先は闇”。

(あ、……でも、このことわざは、こういうことに喩(たと)えることわざじゃないんだっけ……？)

それに、海王寺と手を繋いでいれば、万が一、目のまえが崖だとしても怖くない。

逞しい彼が、きっと助けてくれる。

逆に、海王寺が足を滑らせても、オレが助けよう！ と、鈴羽は考えた。

非力ながら、高校時代は陸上部で鍛えた身体だ。少々のことではへこたれないつもりだ。

少し歩くと、チャペルの建物の、白い円形の屋根が見えてきた。

周りには外灯がなく、入口は真っ暗だ。

携帯用の懐中電灯のあかりを頼りにドアの鍵を開ける。

「なんだか、泥棒に入るみたいだなー」

思わずそうつぶやくと、海王寺は小さく笑った。

そして、ドアを押し開く。

「建物の中は、二重構造になっている」

「二重構造？」

「入ってみれば解るよ」

海王寺の言うとおり、エントランスは吹き抜けになっていて、チャペルとは思えないほど広々としているが、非常口を示すランプなど、最小限の蛍光灯しかついておらず、薄暗い。

だが、庭園内を歩き、闇に馴れた鈴羽の瞳には、祭壇奥のクリスタル・ガラス製の外壁に囲まれた、優美な扇型のチャペルがすぐに浮かび上がった。

「うわー、内装はこんなふうになっていたんだ。スゴイ！ 壁がガラスだから、チャペル内から外が見える！」

鈴羽は顔を輝かせた。

「このチャペルは、私の発案なんだ」

「え？ そうなの!? じゃあ、これ全部、海王寺さんが考えたの？」

「ああ、建築士と相談しながらな」

「牧師台の方が狭くなっていて、うしろが広がった型をしている、少し変わったデザインのチャペルなんだね！」

「【地中海に浮かぶ神殿】がモチーフだが、斬新さもとり入れ、光と水をコンセプトに貝の型にデザインしている」

「光と水？」

「ちょっと待っておいで」

そう言い残し、海王寺はゆっくりとした足どりで、薄暗い廊下を歩き出す。

「どこへ行くの？」

「機械室だ」

しばらく待つと、チャペル内が、まるで魔法をかけられたように、美しく鮮やかにライト・アップされた。

チャペル入口には噴水のような水の演出が施されていて、キラキラと光るクリスタル・ガラスで造られた入口のドアから、新郎・新婦が入場できるようになっている。

そして、何よりも美しいのは、真っ白な大理石の上に浮かび上がる緋色の絨(じゅう)毯(たん)のバージン・ロード。

ライト・アップされるまでは気づかなかったが、牧師台や誓いの十字架もクリスタル・ガラスで、繊細な光の虹に彩(いろど)られている。

「うわあ！ 綺麗!! まるで、光の渦に祝福されてるみたいだ。それなのに、荘厳な神殿風で。ここで式を挙げる花嫁は、きっと、世界でイチバン幸せな気持ちになれるよ！」

すっかり興奮気味の鈴羽は、パタパタとバージン・ロードの真ん中に踊り出た。

「そうかな」

「うん！ きっと、このバージン・ロードは、純白のウェディング・ドレスが綺麗に映えると思う。オレも女の子だったら、絶対にここで式を挙げたい！」

「じゃあ、式を挙げようか」

海王寺はなんでもないことのように、サラリと言う。

「…え？」

「ここで、私と鈴羽の結婚式を挙げよう」

鈴羽はきょとん、とした。

海王寺が、今、何を言ったのか、遠い外国の言葉を聞いたみたいのに、意味が理解で

きない。

茫然としていると、酷く乱暴に二の腕を掴まれた。

そして、唐突な質問を浴びせかけられる。

「鈴羽、キスしていいか？」

「……え？」

(——キス!?)

突然の問いに、鈴羽は言葉を忘れてしまったかのように、何も反応できない。

海王寺の頬が斜めに傾く。端正な顔が、鈴羽の視界の中で、どんどん大きくなっていく。

(ウソッ)

鈴羽はすくみ上がって身を固くし、ギュッと目を閉じた。

本文 p93～100 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>